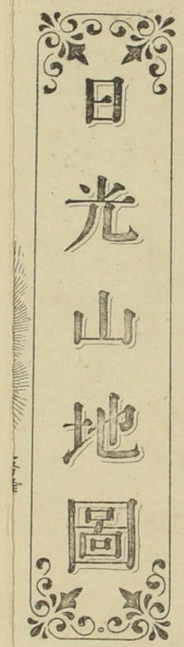
日光山小誌

上

錦石秋先生編輯

日光山誌

金魁堂藏版



日光山地圖

温泉嶽
湯本
湖口
湯龍
白根山
太郎山
女貌山
赤薙山
小真子山
大真子山
七瀧
瀧尾
子種石
白糸瀧
戰場原
地獄茶屋
立木觀音
中宮祠
男體山
又二荒山
二子山
神馬碑
開山堂
産宮
別所
假殿
天狗堂
東照宮
五重塔
二荒山
龍光院
大猷院殿
慈眼堂
空烟
二堂
梶
一瀧
布引
觀光
慈觀
裏見
般若
方等
中茶屋
鈴峯
風穴
清滝觀音
殉死墓
旧殿地
朝陽館
相輪樓
大師
三佛堂
願寺
滿
盛長
旅所
深砂
石碑
里程標
學校
稲荷川
本宮
供所
三層塔
四本龍寺
小玉堂
教夏
興雲院
高照庵
小倉山
霧降
外山
氷岩
龍頭
千手崎
上野島
五大尊
湖水
寺崎
歌濱
華嚴
阿殿
馬歸
細尾村
足尾村
大日堂
西町
大谷川
神橋
假橋
東町
合流
素戔瀧

日光山誌

金魁堂藏版

晃山小誌

例言

一此書の編次は專ら當山參拜者の先導を旨とするが故に廢毀に屬するもの及古事雜事の如きは省て錄せず單に靈場勝區の概略を擧るのみ

一晃山社殿の壯麗天下に冠たるは普く人の知る所たり然れども勝區の秀靈なるに至りては亦社殿の壯麗に讓らず而して筆鋒の獨り社殿に密なるものは勢ひの已むを得ざる処あるべし也觀官予が編次の偏倚あるを咎むること勿れ

一此書を編するに當り一二の參考書なきに非ずと雖ども變革の久しき或は誤謬腐陳に出るもの多く殆ど實際を困めり因て該地の耆老に議り傍ら實見を盡して編を了す然れども予が愚才元より誤聞謬見なきを保り能はず加之文字陋拙故に意の通ぜざる処も亦多かるべし觀官若し附會奇怪の語あらば姑く之を恕し渾沌史を以て一讀して可なり

晃山小誌

錦石秋編

總說

日光山又二荒山と称す下野西北都賀郡よりあり男体山又黒髪山とも云ふ其東より峙つものを女貌山と唱ふ此両山の間より大真子小真子の二峰並列せり太郎嶽の大真子の北よりあり赤薙山の女貌山の東より連る其中間懸崖の瀑布を七瀧と称す是稲荷川の水源なり此川の北岸より不動岩、摺子岩氷岩等雄踞す川を隔てゝ東より直立するを外山と云ふ此山甚だ高峻おらすと雖も諸山の間より獨立する奇山あり其東より聳ゆるを小倉山と称す即ち日光八景の一勝地なり霧降瀧の小倉山の東北一里余町の所よりて屈指の瀑布あり男体山の西南北ハ連山波濤の如く起伏連接して他方より渉れり湯嶽の男体山の西方より峙ち其東麓より温泉あり是を湯元と称す中宮祠の男体山の中腹よりあり旧中禪寺と唱ふるもの是なり南面の幸湖の即ち有名の中禪寺湖よりして南岸より歌ヶ濱寺ヶ崎等の勝地相連りて風景最も美なり華厳瀧の湖水溢れて断岸絶壁を降ること五十五間余関東一の瀑布と称す大谷川ハ瀑布の下流よりして細

編者識

尾清瀧の諸村を過て二橋を架す即ち神橋と假橋とあり是より四里許東下して絹川に入る又大谷の南岸に鳴蟲二宮月見松立等の諸峰並列し山勢東に至りて盡く之を當山地形の概況とす其内部神社佛閣の壮厳より勝区靈場の神秀あるに至りて次を逐て畧説を附す且次條に當山の由緒沿革等を畧記して好事諸君の一粲に供す

由緒及沿革

社傳を按するに今を距ること凡二千年の昔崇神天皇の御宇皇子豊城入彦命親ら崇祀し奉る云々是紀祀の縁由なり其後平城天皇の大同三年沙門勝道威靈の感格に憑り荒尾山の清地を卜し始て社殿を建立す祭祀する所の神は則大巳貴命田心姫命味耜高彦根命是なり而して累年洪水逆逆の時に方り社地の東岸毎に崩壊するに因て仁明天皇の嘉祥三年社殿を恒例山に移す是より旧趾味耜高彦根命を本宮と称し遷座の社殿大巳貴命を新宮と唱ふ是より先承和三年下野國従五位上勲四等二荒神に正五位下を授奉る云々同八年正五位上を授け奉る云々嘉承元年従四位下を授け奉る文徳天皇の天安元年下野國に在て封戸一烟を充つ云々清和天皇の貞観元年正三位を授く同二年勅して神主を置く云々同七年従二位を授け

奉る同十一年階を進て正二位を加ふ云々建仁三年鶴岡并に二所三島日光宇都宮鷲宮野木宮以下の諸社へ神馬を奉まつらる是世上無為の御報賽云々元和三年東照宮遷座明治六年二荒山神社を國幣中社に東照宮を別格官幣社に列し自今官祭仰出さる云々之當山由緒の概畧あり

又種々の沿革を為し神護景雲元年勝道上人姓若田氏下野芳賀郡人大谷川を渡り始て北岸に達し翌年跋渉を企つも山嶮に雪深くして登ること能はす後十六年を經延暦元年三月辛酉山頂に達するを得たり是より先四本龍寺及ひ本宮中禪寺等を創立す嵯峨天皇の弘仁元年勅して當山に満願寺の號を賜ふ八年上人の徒弟教旻和尚始て座主の職を拜す是を當山座主の第一世とす十一年空海和尚登山して教旻道珍の諸師と議り瀧尾權現の社殿を建立し尋て寂光及ひ清瀧權現を勧請す又中禪寺の東北に風穴あり春秋両度必す國中を吹荒し

よりて荒と唱へしを此時辟除結界して日光と改めし等のことあり嘉祥元年四月圓仁和尚登山して三佛常行法華の三堂を建立す初め一山の衆徒真言を奉せしを圓仁和尚登山以後終に天台を奉ずることゝなれり座主第四世昌禪和尚社殿を法華常行二堂の後に移

す是より旧社を本宮と称し新社を新宮と唱ふ仁治元年座主第二十二世辨覚和尚一寺を建立す勅して寺號を光明院と賜ふ後應永二十七年故あり廢絶す帰せり元和三年四月東照宮遷座ありてより以来一山尽く壮観を極め廢毀す属せし旧社も追々修理を加へ美観を増す至る同年天海僧正名命まよりて當山の住職とある是を中興の祖とす即ち座主第四十八世あり五年新宮唐門及び拜殿を建築す七年僧正本坊を光明院の廢地す新築す寛永三年本坊火災の為めす灰烬とある故す僧正又座禪院の旧跡す移る四年徳川家光公の時命を以て別殿を本坊の跡地す営む十一年座禪院の隣房を撤して前の別殿を移し本坊を現今の地す再築せり十三年三月朝鮮國より花瓶香炉及び燭臺等を献納す二十年又輪轉燈及び洪鐘を献す此年相輪樓を奥院す建つ後処々す移す正保四年四月勅使来りて東照宮幣帛を供す是より先不時す供幣の事あり しお此年より以来年々四月幣帛を供するを恒例とす是を例幣使と云ふ慶安元年酒井忠勝五重塔を献す四年四月徳川家光公薨す遺命まより當山す葬る是を大献院殿と称す今の霊屋と唱ふるもの是あり承應三年一品守澄親王座主とある即ち第五十一世あり始めて輪王寺殿と称して日光東叡両山を司掌せらる是より代々親王家相承して座主の職を継く事といあれり明暦元年朝鮮國より金燈炉二基及び楽器を大猷院殿の廟前す献す明治元年第六十二世の座主公現親王適々東叡山す在り兵馬争闘す遭遇して會津す走る茲す於て座主の職絶たり此年神佛分離令出るまよ及んで従前僧形を以て神祇まよ奉仕するものハ皆復飾せしめらるゝまよ至る當山も亦今を奉して日光権現を二荒山神社と唱へ東照宮も純然たる神社まよ帰せり明治六年三月勅して二荒山神社を國幣中社まよ東照宮を別格官幣社まよ列せられ皆宮司を置て司掌せしむ又一山の寺坊を満願寺まよ併せて一大寺院とし當山諸堂の佛まよ属するものを總掌せしめらるまよ近年又廢跡を継きて諸寺を再興すと雖と従前二十六院八十坊の盛あるまよ比すれい寥々として禾黍の歎おき能ハす然れとも二荒東照の両社まよ至りてハ更まよ壮観を損することなく霊屋の如きも亦主掌するもの有りて晃山の勝地と共まよ万世まよ存すべし況や聖上東巡の際辱くも鳳輦を枉させられ二荒東照両社并まよ霊屋へ進饌料を供賜せらる実まよ當山の盛栄を輝すまよ足る且近来有志者脇力して保晃會を興し全國まよ醵金して當山保存の道を謀る其額已まよ十三万余圓まよ及べりと是唯まよ一山の洪福のみならず天下の至幸なり

日光入口

松原町　石屋町　御幸町　松原町ハ日光入口の町あり古昔ハ此辺總て松原あるを以て松原町と名つけしと云ふ傳へ聞く今悉く町並を成せるハ寛永以後のことありといへり御幸町ハ元と新町と称し山内中山の地なるあり石屋松原の両町ハ山内又ハ山外処々に散布せる人家ありしが寛永十七年故ありて新町を鉢石町の下に移し其地を四ケの寺院に賜ひ山の内外に散在人家を稲荷町及ひ松原町等に移さる當時此三町を新町とのみ唱へしと云ふ

龍藏寺　石屋町の北側にあり瑞雲山と号す寺内に観音堂ほか當國三十三所の一にして大士の尊像ハ慈覚大師の作あり又惠心僧都の作ありとて辨才天を安置す此寺ハ古昔昌山重忠の季子重慶阿闍梨の草庵を結ひし旧跡あり重慶不慮に誅せられ久しく廃絶せるを當山の座主再興せりと云ふ

神主山　石屋町の南に當る山頂まで凡そ一里頂上平垣ある処十間許此辺都て童山にして東南十里を遠望すべし

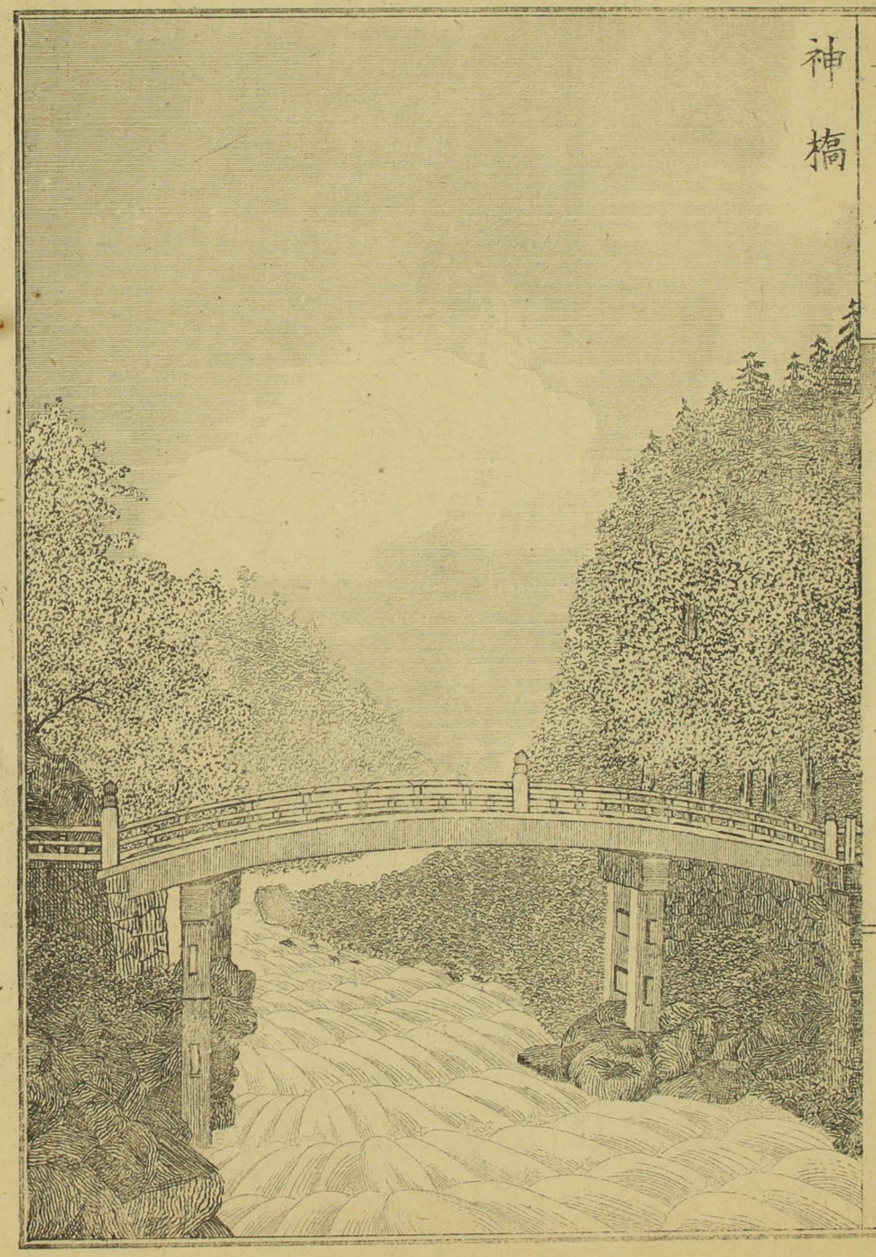
稲荷町　一名を出町と云ふ御幸町と下鉢石町との裏手にほる市街あり旧とハ本宮社地の東方に町並人家ありて鎮守稲荷の社を祠れるを以て稲荷町と唱へ川の名も稲荷川と称す今猶本宮の東方ある谷川と云ふ此川の水源ハ女貌山の七滝より落ち来りて水勢常に岩石を穿つ寛文年中図らず水源の山崩れて水路を塞き為に渓水湛へて池沼の如く程あく土塊を押流して洪水遽に漲り来り沿岸の人家ハ残らず流失して溺死人も多ありしといへり其後町家を此所へ移せるを以て出町とも唱へしとぞ火の番屋敷も亦流失の後此に移せりと云ふ

下鉢石町　中鉢石町　上鉢石町　晃山の方を上として上中下の三町に分ち長さ七町許維新前ハ此三町にて傳馬駅次を務めしと上鉢石町の両側にハ當処の名産指物塗物其他の諸品を鬻ぐ商店軒を連ねて住す又中鉢石町の裏に鉢に似たる大石あるを以て町に名つけしと云ふ鉢石の炊烟ハ日光八景の一あり

観音寺　鉢石山と号す中鉢石町南の山麓にあり境内観音堂の本尊ハ弘法大師の作ありと云ふ

警察分署　上鉢石町を出ハ左右四方開けたる処の左りの山際にあり維新前迄ハ下乗の石柱

神橋



なりしを以て土俗今に至るまで此処を下馬と唱ふ前面ハ即ち大谷川にして二橋を架せり

星宮　下馬の南の山麓にあり小社と雖も日光縮素の社頭あり初め開山上人幼名を藤丸と称す七歳の時夢に明星天子忽然と現ハれ親しく告て曰く二荒山ハ神代より三神垂迹の霊地あり汝速に大心を発し彼山川を跋渉し勝地を草創して永く群生を濟度すへし云々藤丸奇異の思ひをなし是より発心常に怠らす遂に二十七才の春薙髪授戒して當山開基の功業を成せり上人曾て徒弟に告て曰く我此霊地を闢き精舎を建て世の崇信を得るものハ單に明星天子の神勅と深砂大王の擁護によれり汝等及末代我耳孫たるもの常に此両神を尊崇して必す神恩を忘失すること勿れと因て神恩報謝のため一社を建立し明星天子を勧請して星の宮と崇めしとぞ

神橋　古へ山菅橋と称す神護景雲元年勝道上人跋渉の砌此処へ来りしに両岸高く聳え激流盤渦して濟ること能ハさりしかハ悒然として巖上に跪き丹精を凝らし神佛に祈請すること数刻須臾に髣髴として深沙大三北山岸に現れ手に持てる青赤の両蛇を河上に向て放し王ふと見へしが忽然として紅霓の浮ふが如く両岸に一條の長橋を架せり上人深く冥助

を感嘆すと雖も凡人未た蛇橋を渡ること能ハす暫く躊躇するに奇哉橋上に数根の山菅を生し恰も山間に一路を開きたるに異あらす此に於て上人ますゝ感歎し遂に徒弟と共に長橋を渡りて北岸に達することを得たり後ろを顧れハ大王蛇橋と共に消失て其処を知らす是より此橋を称して山菅の蛇橋と唱へけるとあん後上人徒弟と謀り小橋を架して僮に往来を通せりとそ大同年間朝廷祈願應報の為め日光権現の宮殿を改造せらるゝに及て當國の國司橘利遠當山造営の勅を稟王ふり山下に住する神司にして工匠を兼る山嵜太夫といふ者に令して大橋を架せしより諸人渡るに易きことを得たり尓来十六年毎に新架の令を受け太夫の子孫代々其業に従事す太夫通称長兵衛と号する故に里俗橋掛長兵衛と異名せり利遠勅を奉して板橋を架せしより年を経ること八百余年東照宮遷座の後寛永六年に修繕を加へ十三年に之を新造せらる其結構に長さ十四間幅三間四尺左右前後の欄干すり橋板に至るまて總朱塗にして擬宝珠及ひ手摺の金物に滅金を施し只板裏桁等に黒塗すゝ両岸の柱趾に大石を削りて之を支ふ実に万世不易の石柱なり其時の造構極めて壮麗あることより別に假橋を架して諸人を通せしむ後橋の両端に欄楯を設けて常に金鎖し

将軍家の登山及ひ毎歳二月二十三日冬峰行者の水取と三月二日出峰の外に總て四民の通行を停止せり　めらる東照宮二十一回忌に摂家門跡其他月卿雲客下向ありしとき三條実條卿の歌に

山菅のかけて危き古橋を石を枕に流る水代の音

假橋　神橋より十四間許東に架す橋柱を用ひす両岸より木杭を組出して構成す長さ十三間幅三間牛馬共に通行して陥没するの患あり

大谷川　水源は中宮司の湖水より出て華厳瀧へ落来り大沢深谷の間を経流するを以て大谷の名あり此川冷水あれとも鱒山飴魚岩魚等の魚類を産す水源より七八里東流して絹川に入る大谷の秋月は日光八景の一なり

高座石　神橋より二十間許の上流にあり往時此所に鼻突石讀誦石と称する奇石あり一か貞享四年の洪水に三石共に埋て見えす其後元禄十七年の洪水後再ひ高座石のみ現出せりと云ふ

旧番所　假橋の左向にあり維新前は山内合て十一ヶ所ありしの方今撤去て二三を餘すの

石碑　本宮地下の路傍より、是ハ慶安元年松平正綱東照宮造営の砌り宇都宮街道大沢村壬生街道小倉村より神橋迄并ニ山内十余里の処へ杉の列樹数万本寄進せる事を勤せる碑文あり

本宮社祭神味耜高彦根命　日光三社の一なり、社地ハ假橋の前面右方の丘上ニあり、本社拜殿共ニ鈎葺赤塗なり、前ハ大谷川の流れに臨み東北ハ稲荷川ニ接す老杉鬱々として社殿を囲繞す大同三年初め勝道上人四本龍寺を此丘上ニ創立す尋て西南の地を相して三社権現の祠壇を建つ是當山社頭の矯矢なり、後明徳二年及ひ大永二年永禄五年三回の火災ニ罹りて本宮四本龍寺及ひ末社共ニ焼亡す其後再建して僅らニ旧跡を存す東照宮遷座以後寛文四年更ニ造営し天和四年十二月二十日蓮華石町より失火して當社及ひ其他の堂宇回禄ニ罹るもの頗る多し是を日光山大延焼と唱ふ翌貞享二年公命ニ因て新営す即ち當今の社頭なり

別所　本社ニ向ひ石階を登る左方ニ在り社頭各所ニ別所を設く

四本龍寺　本宮の西北咫尺の地ニあり宝形枋普素木造なり本尊ハ千手観音五大尊及ひ勝道上人の木像を安置す此寺ハ勝道上人當山創立の旧跡なり始め上人草庵ニありて勤行する時毎夜神人来り語りて曰く此北嶺を四神峯と号す東ハ青龍南ハ朱雀西ハ白虎北ハ玄武の住む所なり之ニ於て上人一宇を建立して四本龍寺と名づけ〻と〻後大同三年橘利遠公命ニよりて再興せしとい

如法経堂　別所の東側ニあり

紫雲石　本社の後ニあり平石ニして高さ三尺許

笈掛石　拜殿の左ニあり高さ三尺五寸余

三層塔　本社の後ニあり相傳ふ鎌倉将軍実朝公の建立ニして始の東照宮社殿の辺ニあり後今の地ニ移す貞享年中の火災後再建せりと云ふ

三面大黒木像　初め傳教大師佛法擁護のため叡山ニ安置せるを模造して各別処ニ安せりと

唯心院　東山谷の入口ニあり此寺ハ勝道上人最初草庵を結ひ玉へし旧跡なり上人四本龍寺剏立あり後ハ徒弟等此所を以て仮の道場とす一区々の寺号等ハ設けさりしとい年

を経て正保二年橋本坊を改め古衆徒の称号を復して唯心院と号し寺領百石を賜ふる中興ハ晃海僧正の上足公宥師なり寺内より硯石礼拝あと名つくる謂れなり石もなり又上人の徒弟仁朝の石塔も存せり

硯石　東山谷唯心院境内なり此寺へ勝道上人未た四本龍寺へ移らさる前假りに草庵を結ひし旧跡なり其後上人所持の硯を石下に埋めしなり硯石と名つけしとそ

礼拝石　是も唯心院の境内なり上人草庵なりし時紫雲石の方に當り観音大士の出現せるを此石上にて遥拝せられしより名つけしと

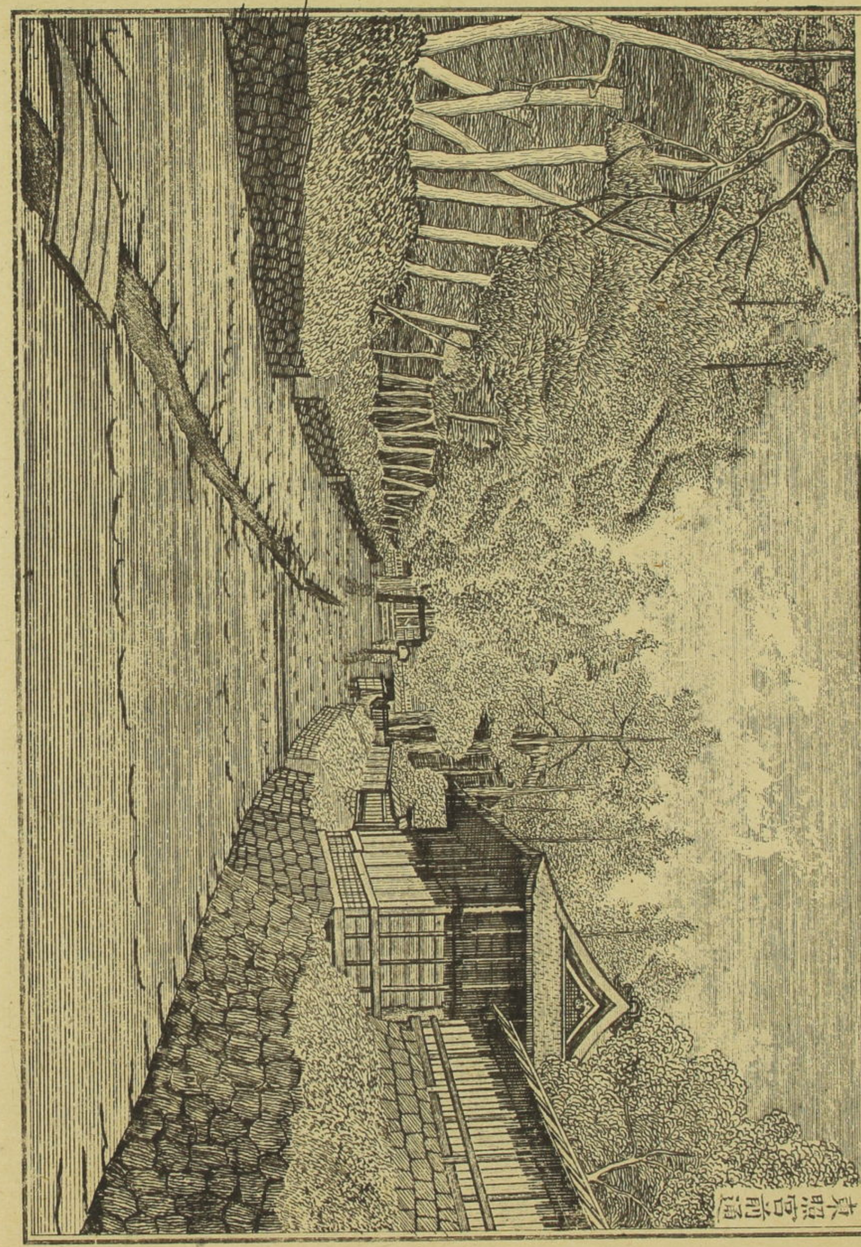
深砂王社　長坂へ登る右の山際なり神橋守護神とす本地毘沙門天ハ勝道上人の手刻なりと云ふ

長坂　深砂王の社前より右へ登る坂路を云ふ東照宮へ詣るの本道なり幅四間許登ること一町半ばかりして平坦の地あり夫より左折すれハ右方ハ本坊の墻壁なりして左方に四ケの寺院あり此辺を中山と唱ふ又中山を過て右折すれハ左方ハ御殿跡地東照宮所有地なりして右方ハ本坊の表門なり此中間の大道ハ即ち東照宮の正面なりして遥かに石の華表を見る

御旅所　御旅所とて別に宮殿の設けるるあらす山王の社なり本社ハ五間に三間拝殿ハ三間半四方銅葺惣朱塗御供所ハ杉葺素木造なり毎年祭典の節ハ三輿の神輿を本社へ据へて供御の式を行ひ而して両殿の中間石甃の上に於て東游の舞楽を奏す其歌舞ハ神輿陪従の伶人七人なりて作せり内一人ハ神楽歌を謠へ二人ハ篳篥と高麗笛を吹き四人ハ舞ふ此舞曲ハ東照宮祭典の始め京都の伶人来りて爰に奏す後久しく廃絶せるを宝永三年時の将軍に請て再興せりといふ當時其事を石に勒して後世に傳ふ今猶社殿の傍に建てる東遊の石碑と云るの是なり

盛長石塔　長坂の上右角浄土院の境内なり平石にして正面に六字名号を誌し右方に俗名安達氏左方に藤九郎盛長と記せり氏ハ源頼朝卿創業の臣にして信濃守に任せらるる公の薨するに及て薙髪して蓮西と号し翌年鎌倉甘縄の私第に歿せし人なり此所に石塔のあるハ甚た怪むへき事なれとも何を原由のあることなしらん

御殿跡地　中山通りを過き東照宮へ向ふ大道の左なる一境地を云ふ旧座禅院の境内なり初め御殿の創立なりしハ今の本坊の地にてありき座禅院廃跡後寛永十八年本坊を今の地



より再建し御殿を此廃跡より轉営して将軍登山の駐在所とせらる享保年間故ありて廃撤せられ爾後普請會所等に使用せりと云ふ

本坊　即ち滿願寺にして御殿地と相對す慶長十八年天海僧正名命により當山に住して中興の祖とある元和二年東照宮遷座のとき迫ハ僧正も座禪院の旧院に住せり七年本坊を光明院の旧跡に再建し後寛永十八年復今の地に轉営せり光明院ハ昔より本院なるを故に移轉の後も明暦以前迫ハ旧号を用て光明院と称せし由一品守澄親王御愛職後明暦元年十一月後水尾上皇の院宣を拜して輪王寺と改めらる寛永年間本坊造立の組織ハ僧正の自図せられ書院等の図画ハ探幽齊守信自適齊尚信等の筆する処あり中に就き尚信の真筆の雁と書院等ハ東叡山の隠殿を移せるあり當時の結構壮麗人目を驚かせしの明治戊辰以後一山の諸寺院を合せ當山上古の寺号を復して滿願寺と称す復明治四年五月回禄に罹り七年更に再築すと雖も時世の変遷終に旧観を復することを得ず

桟鋪　本坊の表門と相並て南にあり初め祭礼の節将軍家の拜覧所ハ別殿の囲内に建設ハ

三佛堂

りしが別殿取拂の後將軍豆山のれい本坊を以て假の柳宮とゝ此棧鋪を拜覽所ゝ充てられしと

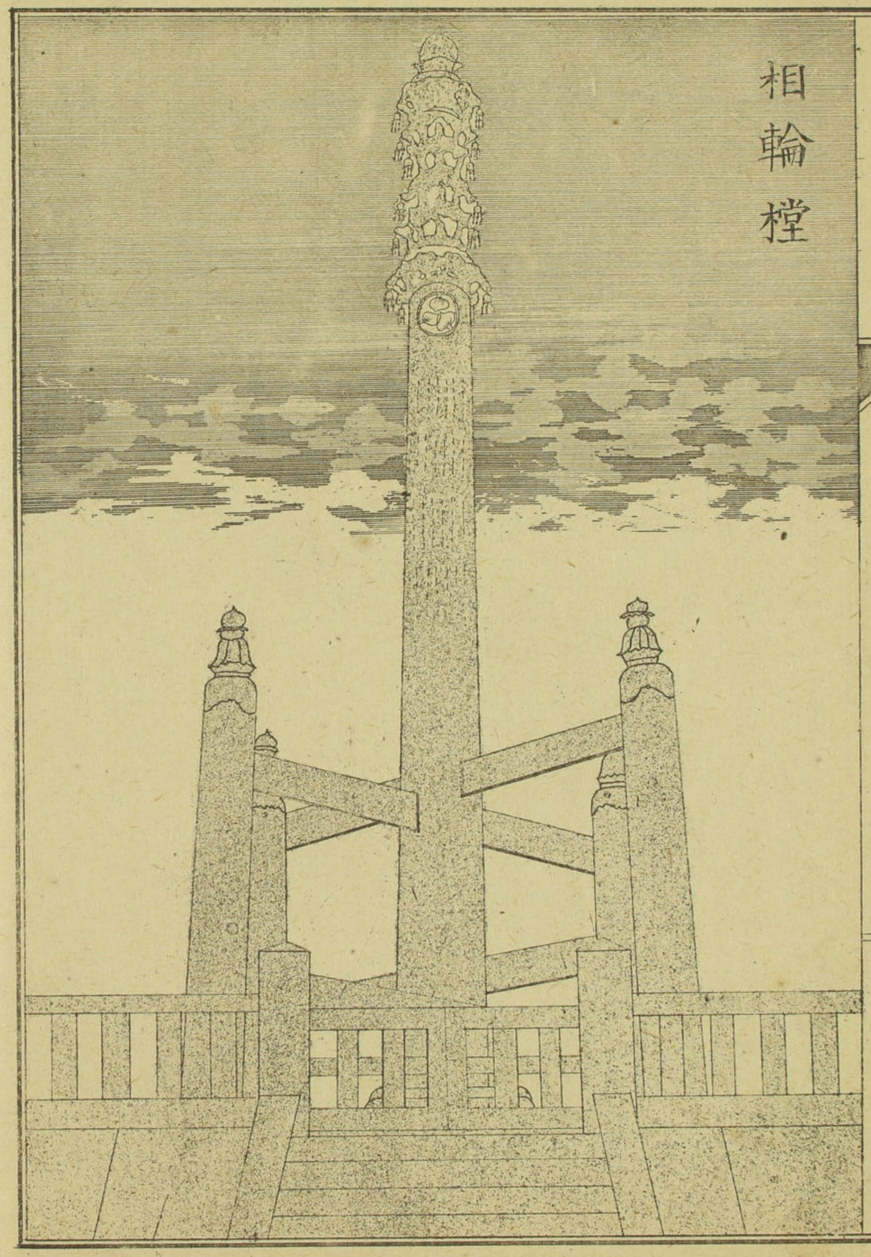
三佛堂　本坊の表門を入り左方ゝ巍々として峙つもの是ゝり往時金堂と称す當山第一の大堂ゝり南ゝ面す前面十八間横十四間銅葺總朱塗ゝして金具ハ滅金ゝり本尊ハ千手觀音馬頭觀音阿弥陀佛の三大座像を安置す此堂元ハ二荒山の鳥居内の北辺ゝはりしの明治維新の際神佛分離の令出るゝ及て本坊の司掌ゝ帰し後来保存のため恩賜三千金を受て此地ゝ轉營す

両大師　三佛堂の北ゝはり初め慈惠慈眼の両大師を請して毎月山内の寺院へ遷座ゝりしか諸寺合併後此処へ安置せりと云

時鐘　三佛堂の左方ゝはり鐘口直径四尺天保二年の改鑄ゝり覆屋ハ桜の素木ゝして一隅ゝ三柱を建つ

相輪樓　三佛堂の西北四尺の地ゝはり天海僧正叡山ゝ比し傳教大師の銘文を摸寫して建立する処ゝり其構成方形の石垣を高く築き上ゝ石籬を廻らし中央ゝ輪樓の銅柱を建て其

相輪樓



高さ地の盤石より四丈四尺元口直径三尺一寸座石八角よりて基石八方形なり上部より金の瓔珞二十七連と金鈴二十四ヶを装飾す滅金金具の下より葵の金紋を附す副柱四基同く銅製よりて高さ各一丈七尺八寸皆擬宝珠を冠す此樓の始め東照宮興院の側より建てしか後新宮馬場の傍より移し後又此処より移せりとゝ又此樓の左右より唐銅の燈炉二基對立す高さ各二丈許上部より金の金具を飾る慶安元年糸商人の献する処

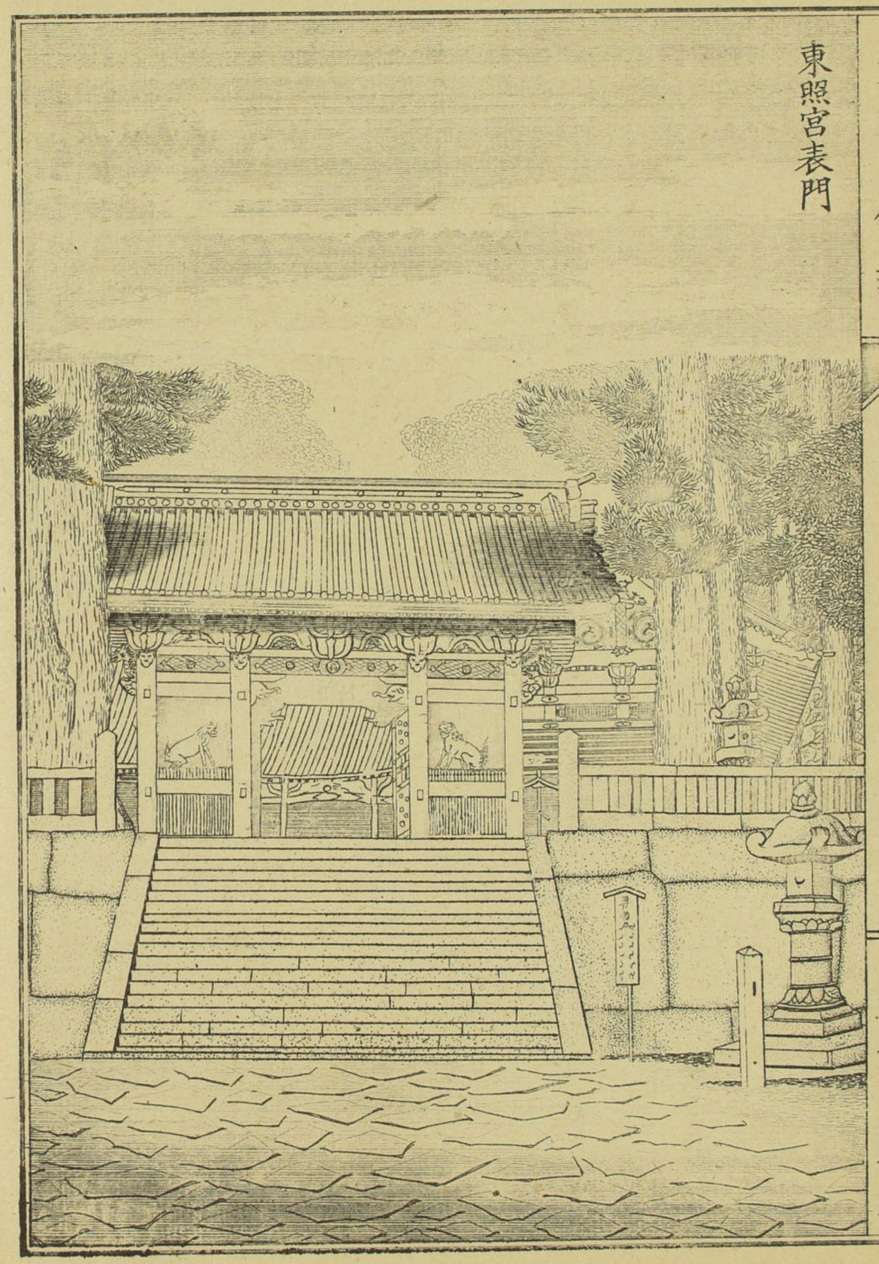
東照宮　祭神徳川家康公ハ天文十一年十二月三十六日参州岡崎より生る永禄元年二月歳十七参州寺部の攻城を初陣として尓来兵馬より従事すること五十八年百折不撓終より天下の争乱を鎮めて統一の功業を開かしむ官三河守より累進して太政大臣より至る元和二年四月十七日駿河の城より於て薨す歳七十五同國宇度郡久能山より葬り安國院殿一品大相國德運社崇誉道和大居士と謚す云々

御鎮座記より曰元和三年二月二十一日勅命により東照大權現と尊称す三月九日正一位を追贈せらる同十五日神靈を下野日光山より遷し奉らんと寅ノ上尅大僧正天海鋤鍬を取る是大職冠改葬の旧例なり同日靈柩久能山を発して善德寺より至る先導ハ則大僧正天海次より山門

の碩学関東の知識等あり将軍家及ひ三家よりの名代として本多上野介正純土井大炊頭利勝松平右衛門太夫正久板倉内膳正重昌秋元但馬守泰朝成瀬隼人正正成安藤帶刀直次中山備中守信吉等鞍馬を勒して扈従せり十六日三島に至る此所に留る二日二十一日武州の府中に至る留る五日二十七日忍城二十八日佐野二十九日鹿沼に至る此所に四月三日迄留る同四日未の上尅日光山座禪院に入る同八日靈柩を廟塔に収む十四日神を仮殿に移し奉る宣命使阿野宰相実顕卿十六日神を正殿に移し奉る宣命使中御門宰相宣衡卿奉幣使清閑寺宰相共房卿あり十七日本社に於て大法會を修せらる導師は大僧正天海呪願は正覚院権僧正豪海證誠梶井二品最胤親王宰す云々正保二乙酉十一月三日勅して宮号を賜ふ是新帝御即位大権現の神助之なるに依てあり人臣よりして宮号を賜りしは東照宮一社に限れり明治六年六月九日別格官幣社に列せられ神威更に赫々たり

石華表　東照宮表門前にあり石材は御影石にして高さ二丈八尺六寸五分柱石の直径三尺五寸柱根入二尺六寸後水尾天皇の宸翰東照大権現の扁額を掲く元和四年四月黒田筑前守長政本國筑前に於て削鉋し遥に南海より運般して献する処なり

東照宮表門



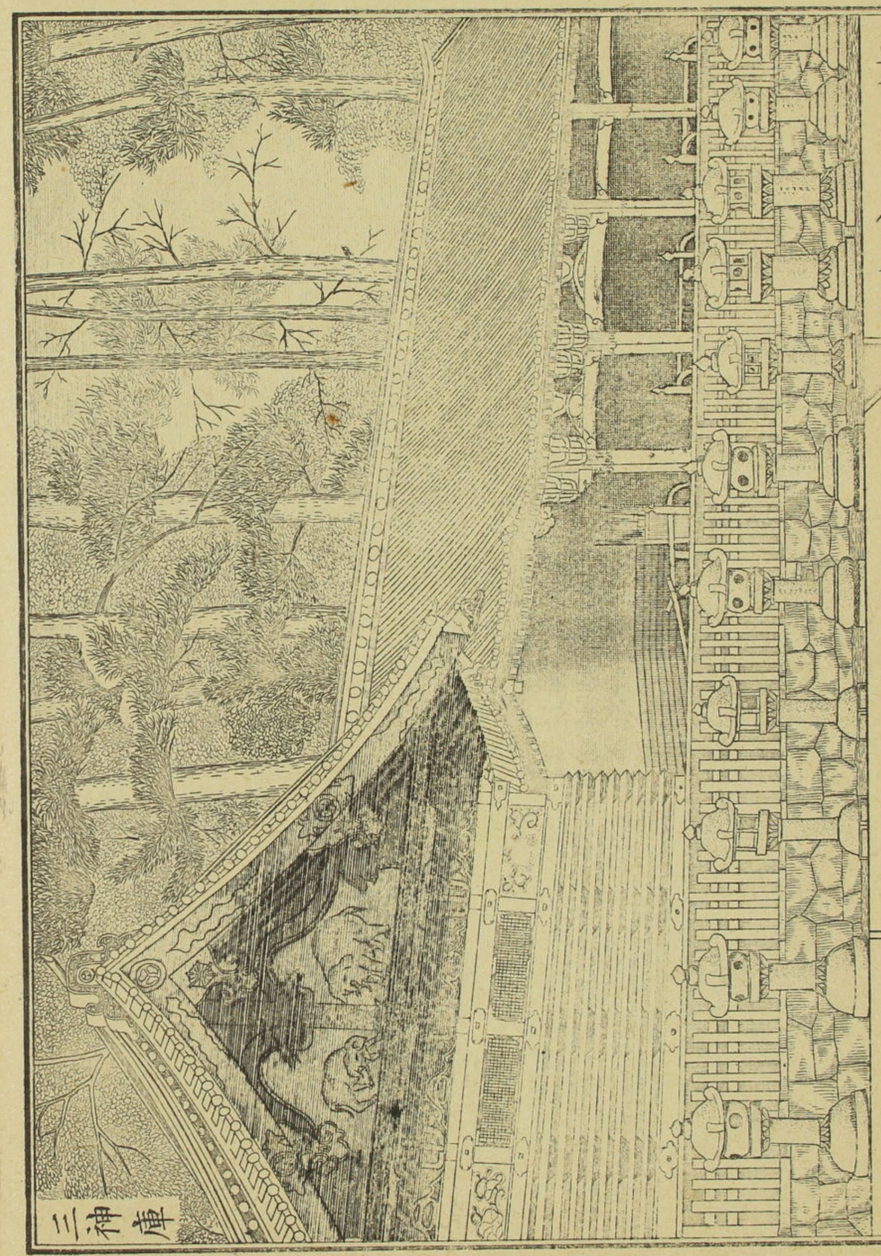
石燈炉四基　各高さ一丈二尺石華表内の左方より第二基ハ元和四年四月有馬中務大輔忠頼又東照宮表門の左右より第二基ハ同年同月酒井讃岐守忠勝の献する処

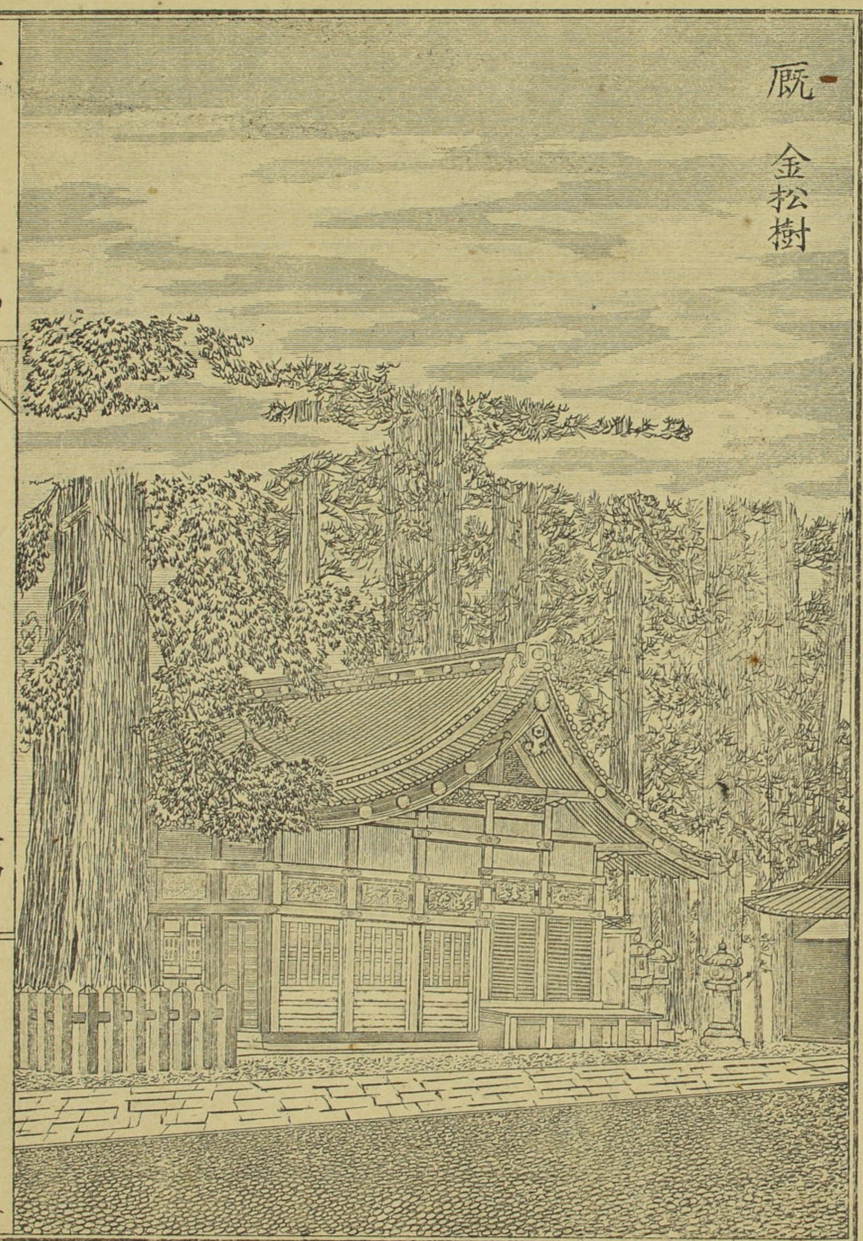
五重塔　石華表の西より第一の總高さ十七間三尺塔内三間四方柱ハ金襴巻外部ハ手先より至るまて總彩色承塵の上通り十二支を彫たり本尊ハ五智如来及び須弥の四天を安置せり慶安元年酒井侍従忠勝の献する処

石垣　表門両辺の石垣其高さ一丈三尺左右より滑海藻石阿房丸石と名つくる二大石より各大小異ふれども阿房丸石の如きハ横二丈二尺高さハ一石を以て石垣の上下を貫く其臣大驚くべし

表門　石華表の正面より當れり前面四間横二間余銅葺物采塗まして極彩色あり門の左右より金の獅子を置く此処より以内ハ方形の石甃を敷き陽明門に至るまて数百歩の間を三折し左右ハ丸の小石を敷詰め寸許の土塊を見す又表門の両辺より塀囲を設け東ハ裏門より達し西ハ新宮馬場の大半に至る

三神庫　表門を入り右方に相並ふ三庫兵に向を異にす中の一庫ハ南に面し前後の二庫ハ西


三神庫


厩
金松樹

に向ふ銅葺總朱塗極彩色を施す第一庫の側面承塵の上に五尺許の大象二頭を刻成す恰も生るゝ如し探幽守信の素圖の彫刻ありと云ふ左もあるぬべし

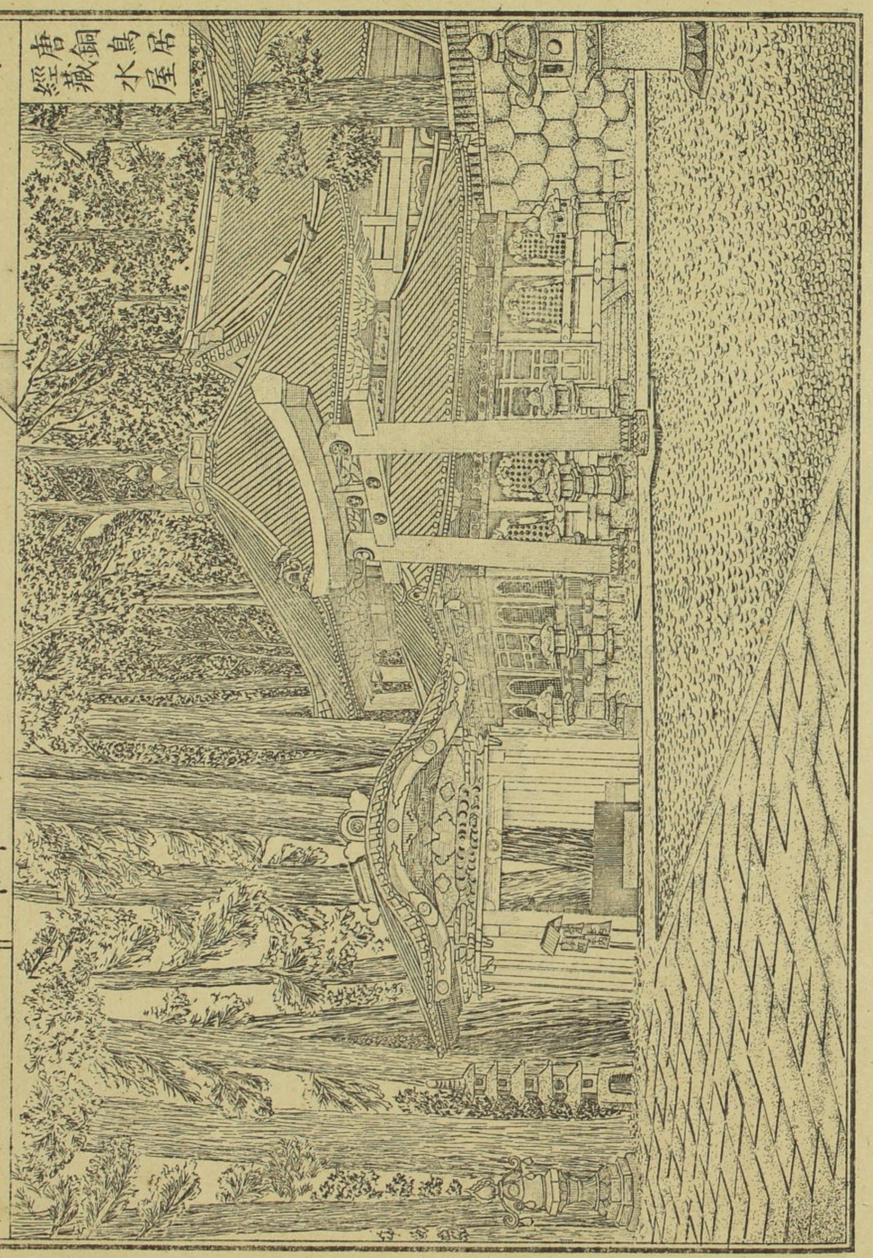
厩　表門内の左方にあり素木造り猿猴花実の彫物真に迫る總て表門内の結構は惣朱塗大着色ふれとも素木の造構は此一棟に限れり

金松樹　厩の側にあり実は本槙と称するもの周囲一丈余弘法大師高野山より移せる処あり

番所　厩と相並ふ里俗赤番所と唱ふ番官更番して社内を警衛す

御手洗水盤　土俗御水屋と唱ふ番所の西方にあり水盤は御影石にして長さ八尺五寸幅四尺高さ三尺五寸常に盤底より清水涌出して四方に溢る覆屋は二間半に二間唐破風造り破風下に飛龍の彫物を飾り其下に激浪を装ふ桁柱共に御影石にして一隅に三柱を建各地に金具を施して構成頗る美麗あり元和四年鍋島守の献する処あり

唐銅華表　水盤屋の前にあり高さ二丈余笠木の表裏に金紋を附す三代将軍の献寄ありと云ふ



輪藏　水盤屋の北方より堂の廣さ六間四面二重宝形造り四方より扉を設く堂内八石甃より
て左右より後の方一間通り楊床より疊を敷く中央の輪藏より一切経を納む其前より傳大士左
右より普成普建の木像を安置せり里俗之を笑堂とも称せり

南蛮鉄燈炉　陽明門へ向ひ右の方石垣の下より二基對立す共に高さ八尺元和三年仙台宰相政
宗の献する処里俗相傳ふ此燈炉を製作するに当りて領内三年の租税を費せりと云ふ

諸家献備燈炉　總数百十六基唐銅十五基石百。一基

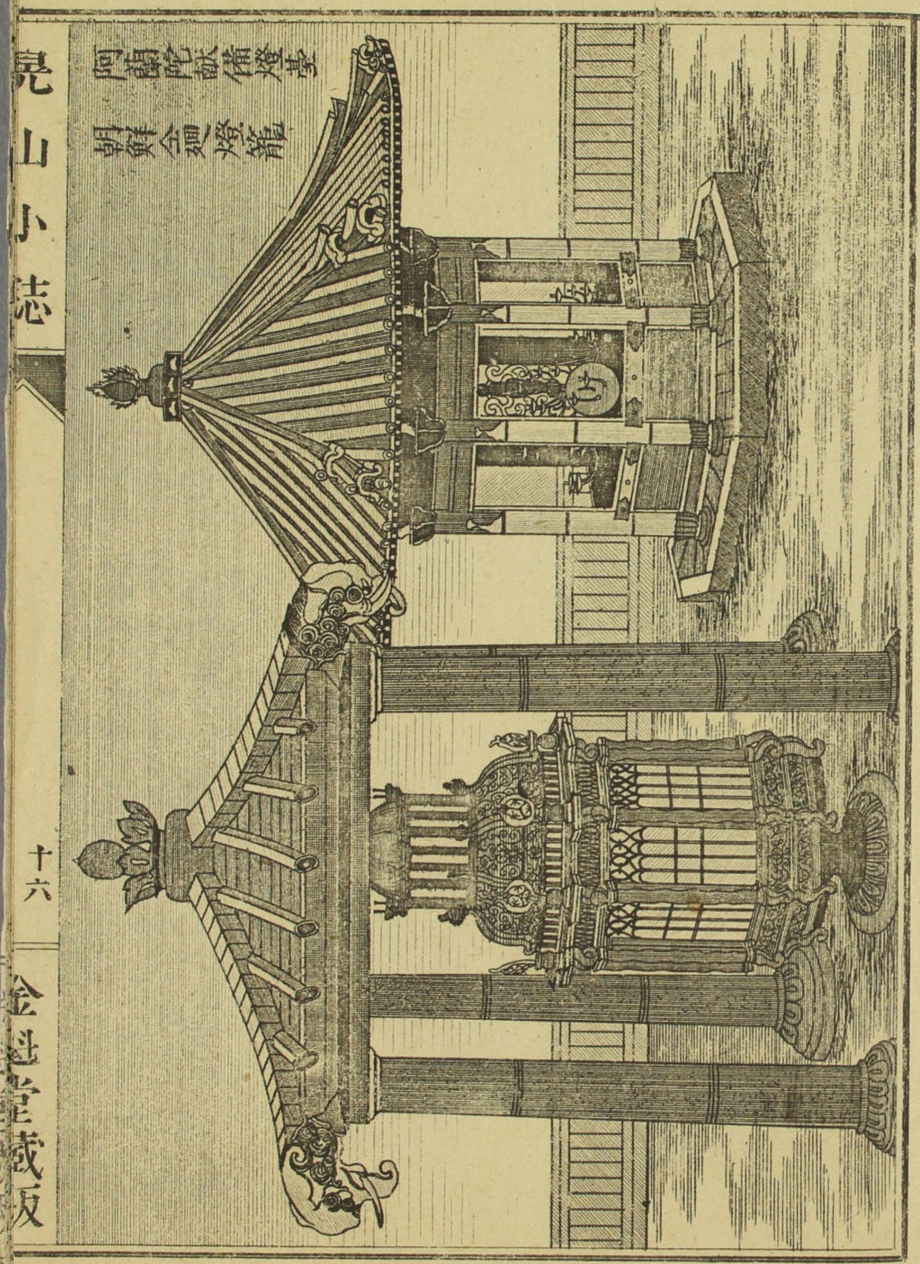
飛越獅子　陽明門前の石階を登りて左右の石欄内に附着す往時将軍家登山なりし時此
名技を見て喜色ありしと故に恐悦の獅子とも唱ふ此石籬内を總て中段と称す

朝鮮献備鐘　龍頭の下に一竅あり里俗蟲喰鐘と云ふ覆屋は四趾にして唐銅製なり

朝鮮國献備燈台穂屋　穂屋は九角にして黄銅を以て作る回轉自在なり網い鉄なり高さ一丈二尺
許正中に主柱を建て之に枝釭両段を附す毎段に燈釭各九個を設く覆屋は前に同し

阿蘭陀献備燈台　高さ一丈許主柱に枝釭を附すること三段毎段燈釭各十個

琉球献備燈台　里俗蓮燈篭と云ふ唐銅製高さ一丈二尺許主柱の上端に一釭あり其下を三



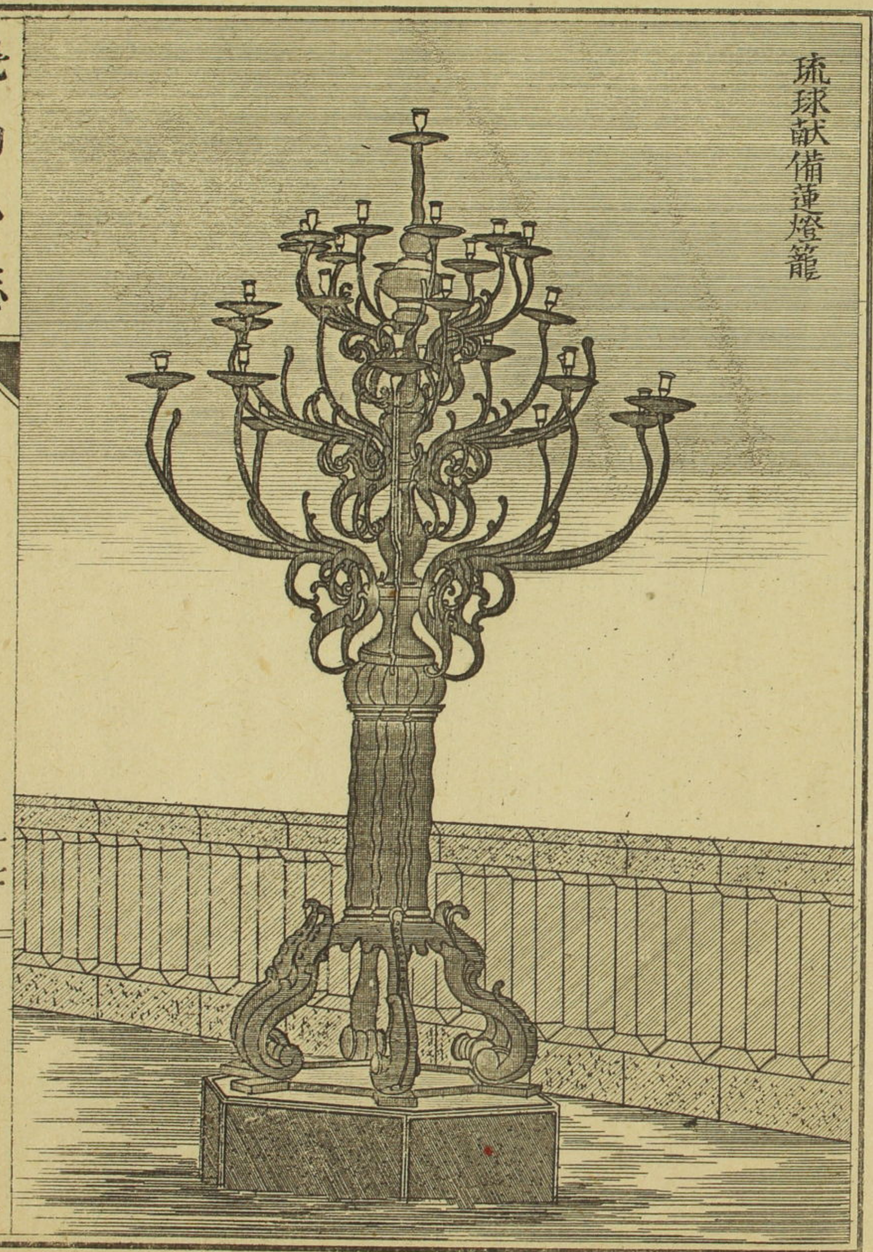
段とし毎段の燈釭各十個台下ハ六の蟠足まて之を支ふ

鐘楼　朝鮮鐘の東まほり高さ三丈五尺許土台石際五間まは四間二手先まして皆龍頭を組出せり楼腹ハ銅板を以て包む金具ハ悉く減金あり

鼓楼　朝鮮穂屋の西まほり造構鐘楼まは異あらすと雖も只手先ハ方形あり即ち鐘楼と共まは陽明門の左右まは對峙す

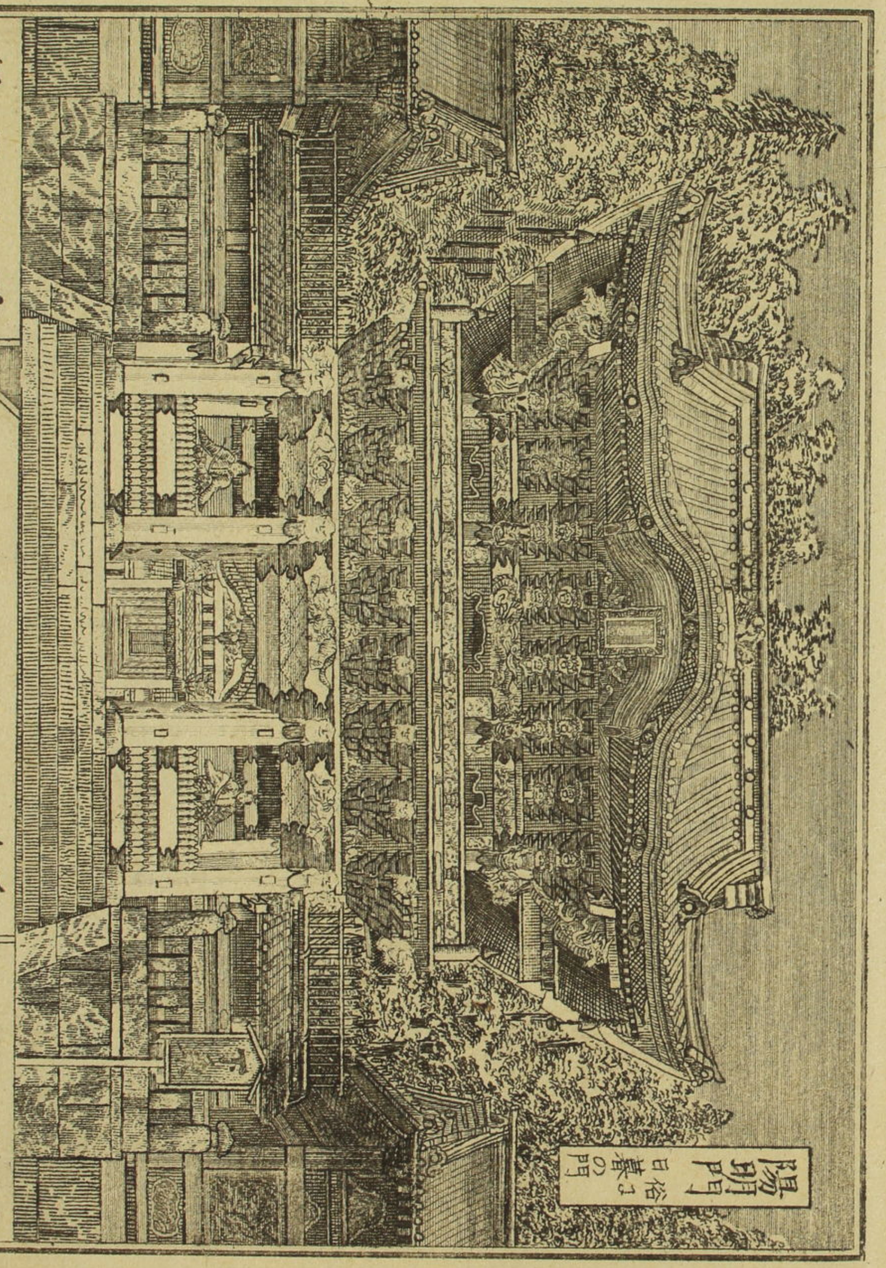
本地堂　鼓楼の西まほり大間造り前面十間横六間向拜ハ七間まは四間鰐口を掲く内柱ハ惣だ〻階段ハ五級赤銅まて作る正面まは参州峯の藥師の模造を安置し左右まは日天月天十二神将四天王其他諸佛の像を陪列せり内陣の天井まは長さ八間の蟠龍を墨画す狩野安信の筆あり

陽明門　石階を登りて中段より正面まは高く仰くもの是あり里俗日暮門とも唱ふ方位南まは面す前面三間半側面二間余三手先造四方唐破風垂木ハ二重扇垂木まして四隅の簷頭まは金の大釈を掲く四方の破風下まは二頭の麒麟を刻す正面の扁額ハ後陽成天皇の宸翰あり神号の文字ハ純金まして其外ハ紺青を以て之を填む四隅の柱まは添て金の雲龍を掲く手先まハ



琉球献備蓮燈籠

数頭の金龍を組出し其下多ク舛組の間々ニハ桐ニ鳳凰を彫む直下の象鼻ハ白色龍馬の彫物此中央間ニ又白龍を刻せり俗ニ之を目貫龍と云ふ高欄の手摺ハ臘色ニ金金物を装ひ欄間ハ間毎ニ唐子遊の九彫揚俗ニ之を唐子千人の智恵遊といふ高欄の下ニ亦三尺間毎ニ牡丹ニ金獅子を彫出す其下ニ舛組の間々の彫物ハ正面の三区ハ周公聴訟の図左右の四区ハ琴棋書画の人物あり西側ハ商山四皓虎溪三笑八仙の内酢吸三聖東脇ハ遯思邈四臏禍人張良後面ハ琴高馬思公上利劔費張房王商鉄拐等あり其下の桁鼻ハ白獅子を彫出し其間ニハ乱獅子を彫せり柱ハ十二本皆桧の皿柱ニして白地ニ雲菱の地紋を彫り各処ニ皿大の紋を設けて中ニ鳥獸草花を彫刻す裏の左ニある一本の柱ハ地紋を倒ニ彫む土俗魔よけの柱と云ふ羽目ハ牡丹唐草の透彫左右の天井ニハ天人を画き両間ニ仕切り舞降の二龍を墨画せり之れ探幽齋守信が筆する処尓来修繕の際と雖も曾て入手せすして妙手を存せりと門の左右ハ前面ニ隨人を安し裏面ニ金獅子を置く門の袖屏の表ハ白獅子裏ハ金獅子あり此他種々の彫物枚挙するニ遑ならす故ニ拝覧の人殆と還るを忘ル日暮門の名称空しからさるあり傳へ言ふ此門より以内の彫物ハ守信安信の素図ニして彫工が亦天下の名技を撰へり



と云ふ

回廊　陽明門の袖屏より續き東へ二十一間北折して社務所に達す西へ十二間同く北折して永く石垣をそて尽く此羽目の大彫物へ松竹梅孔雀鳳凰鶴水鳥等の浮彫あり

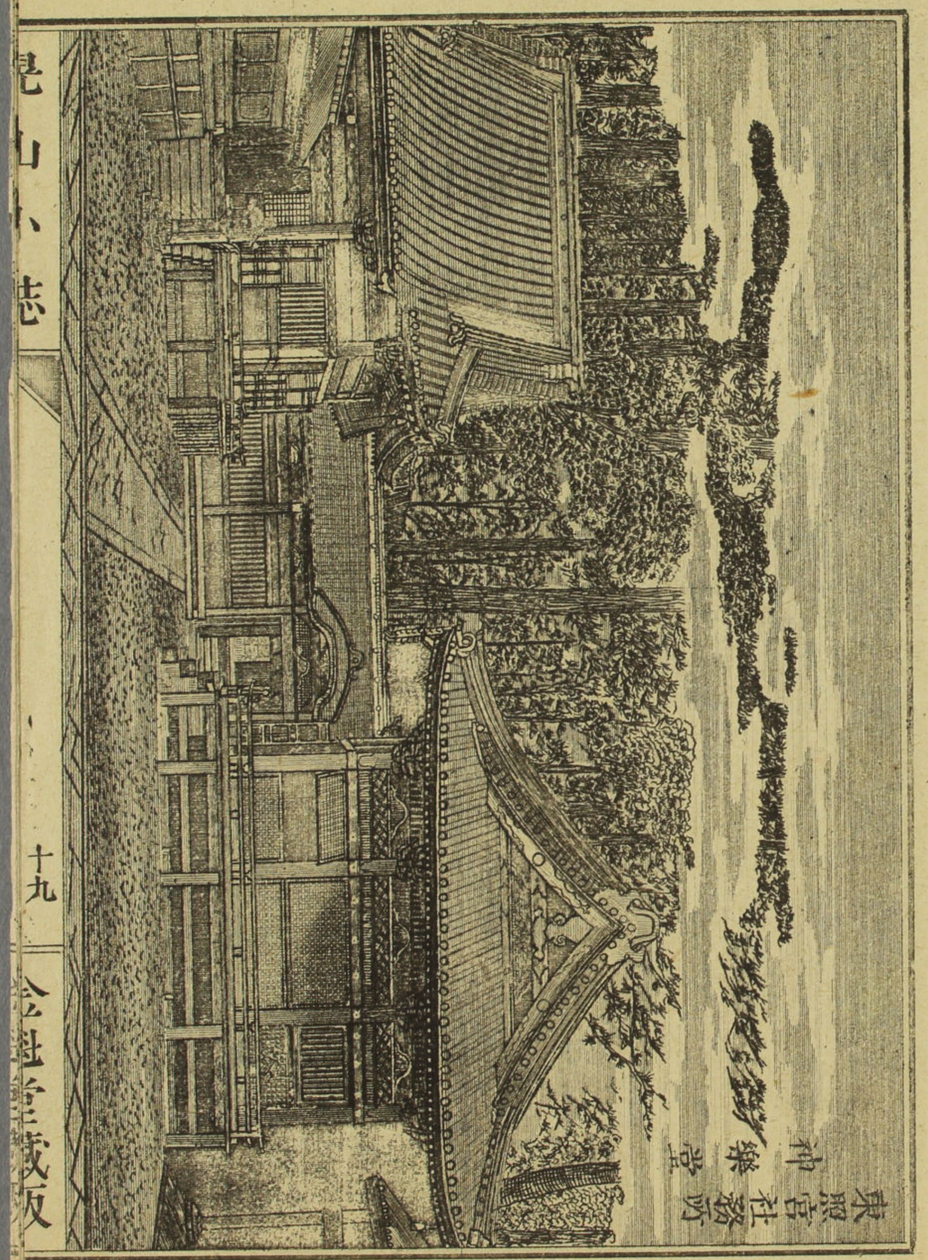
袖輿舎　陽明門の西より前後に唐戸口を設く天井へ天人を画けり

神楽殿　陽明門の東より拜殿に面せり

社務所　往時護摩堂ト云フ

神楽殿の西北より西に面す左右上部外通平桁の上草花鳥の彫物あり往時正、五九月護摩修法ありし処ありと云ふ

唐門　陽明門の正面に当る前面一丈一尺横七尺四方唐破風造り前面破風上の屋棟に唐銅にて作れる獅子に似たるものを里俗傳て恙と称する蟲ありと云ふ大さ三尺許り四趾ありを以て繋く東西の棟上に釘製の二龍あり長さ五尺許り又前の破風下へ巣父許由其下へ河骨杜若其下平桁の上ふるへ帝堯の百官あり後の破風下へ波に兎其下へ竹林の七賢西脇ハ七福人東脇へ七仙人等を彫刻す前面の両柱へ唐木にて昇降の二龍に梅竹を添彫す皆木地の高彫あり後面の二柱ハ白地に唐木の花木瓜と二行に拑入す天井へ白地に天人彈琴の図

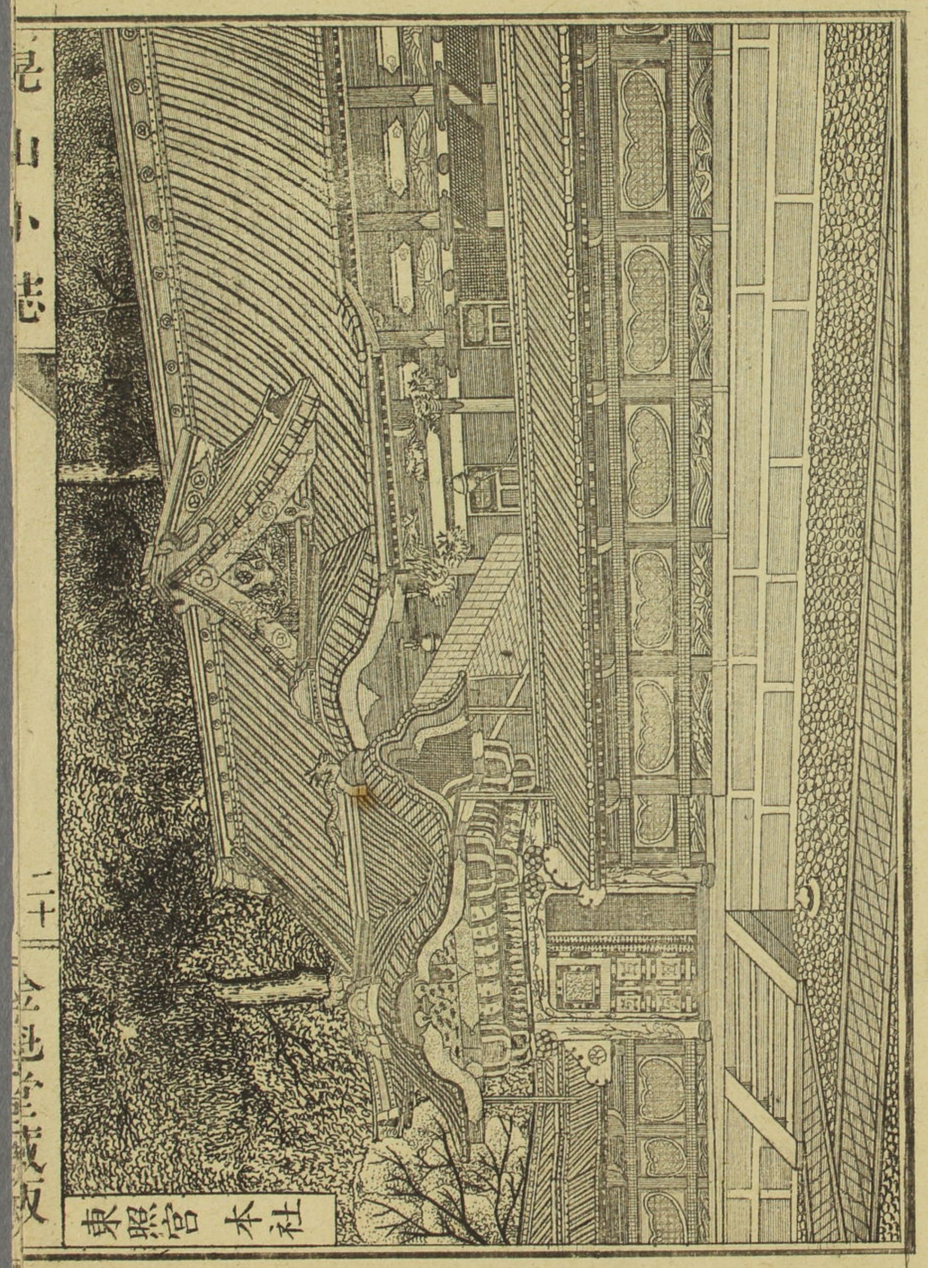


を刺し門の両扉ハ唐木にて梅菊牡丹等を彫刻せり其精妙に至りてハ筆紙のよく尽さ処に
ならさるあり

瑞籬　唐門の左右より拝殿本殿を囲繞す欄間の上あるハ山鳥下あるハ水鳥共に籠彫にして
極彩色あり

唐銅燈炉一基　唐門外の東方にあり献寄の品ありと云傳ふ

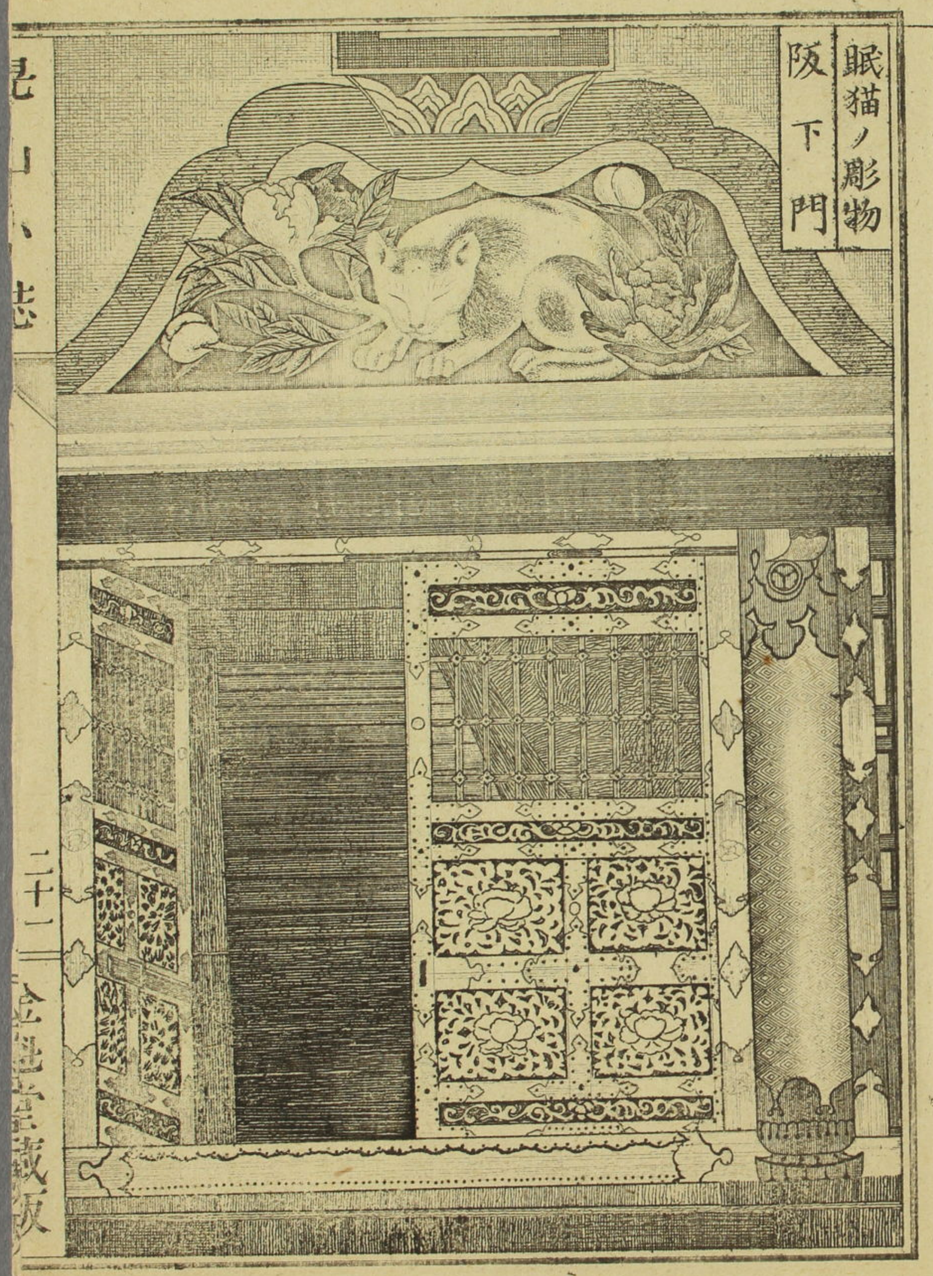
拝殿　唐門以内ハ往時賤人の拝覧を許さゞりしかとも方今許して以て尊厳を知らしむるに
至る亦開明の洪福なり方位正南に面す前面十一間二尺側面四間二尺千鳥破風及向拝より
千鳥破風の枇杷板ハ松に双鶴向拝の破風下ハ雌雄二虎の彫物あり向拝の四柱ハ綸子形の
地紋を彫り処々に圓紋を設け其内に種々の禽獣花卉を彫刻す左右の虹梁上ハ白獅子象鼻
及ひ手挾ハ白龍の丸彫あり雲手先の下ある外組の間ハ菊水の彫物正面長押上の三区ハ花
木に種々の小鳥を彫り左右より両傍ハ桐に鳳凰を刺せり唐戸ハ三扉四方上部唐戸の羽目
ハ牡丹唐草外ハ臘色に唐草の蒔画あり濱椽及ひ高欄も共に黒臘色あり殿階ハ五級悉く滅
金板を以て張詰たり又殿内の結構ハ柱ハ総金ダミ中央の天井ハ折揚二重の格天井其内に



画ける丸龍ハ岩紺青を以て彩色を施し毎頭形を異なせり内承塵ハ二重両面の籠彫上なる三十六歌仙の額を掲ゝ和歌ハ後水尾天皇の宸翰画ハ土佐将監光信の筆あり東の襖戸ハ金泥地なる麒麟と竹を画き西ハ獅子を図せり探幽守信の筆ありといふ其東なる聽聞所にて當時将軍家着座の間なり北の上段ハ天蓋折揚造り其正中なる伽羅木なる葵章一個を作せり簾を垂れて南北を界る東北の額羽目ハ桦の一枚板なる地紋を刺ゝ唐木の寄木なる桐なる鳳凰及ひ牡丹竹等を作為す又西方ハ大臣家着坐の間と称を同く天蓋折揚なりして正中なる天人を彫る西北の額羽目ハ是も唐木寄なる鷹及ひ松柏楓等を彫成す其精巧実なる人目を驚うせり又拜殿と石間との界なる堆朱の巻柱と称するもの四本あり

石間　拜殿本殿の中間なるある一室をいふ西方なる拜覧人の入口より椽ハ一段低く高縁の席を敷けり其席下ハ一枚の石甃ありといふ是より本殿を拜すれハ正面の左右なる金銀なる作る松竹梅の立花一對を棒け殿扉の金彩眩輝して神威更なる嚴然たり

本殿　前面七間側面五間二尺五寸屋棟ハ御所棟造なる千木勝男木を飾り破風ハ鳳凰の彫物手先ハ金色の獏頭を組出し承塵上ハ白菊の高彫あり石間ハ續ける手狹の上下なる金の牡丹



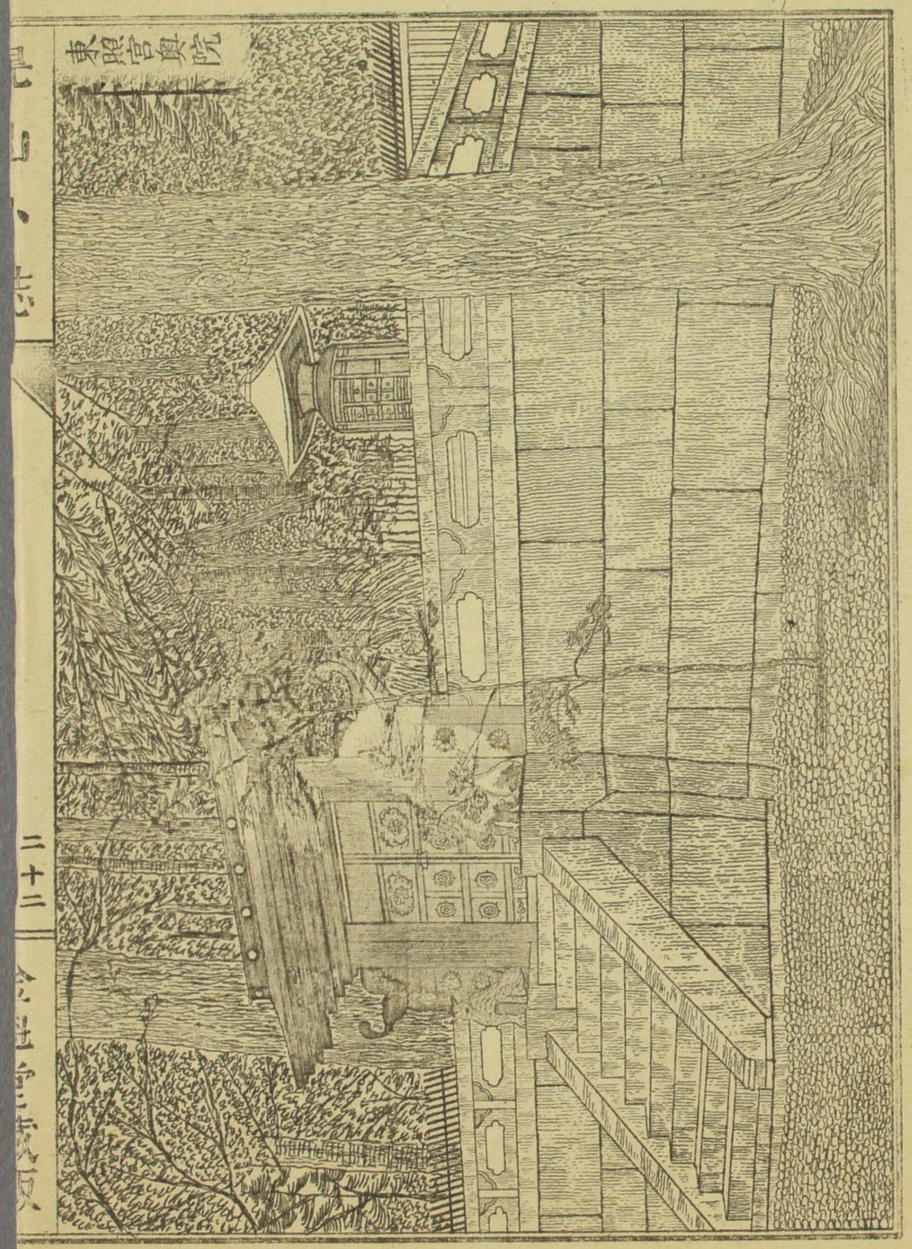
眠猫ノ彫物
阪下門

唐獅子を金刻す正面及左右の二間ハ唐戸を以て金鎖〜中の左右ハ金地ま獅子を画き服障子ハ松ま天人を刻せり後面ハ中央ま唐戸口を設け其左右ハ金地ま獅子を画けり殿の内部ハ窺知るべからさるも正面おるハ幣殿次て内陣内々陣ふと唱ふる宮殿ありと云ふ

坂下門　唐門より東ま當る廻廊の承塵上蛙股の内ま眼猫の彫物あり里俗殊ま称揚せ此潛戸を出れハ即ち坂下門あり桁上ハ松竹牡丹ま双鶴社ハ白地ま紗綾形を刻ミ天井ハ蜀紅地ま牡丹菊の折枝扉の羽目ハ牡丹唐草の透彫を彫刻す是奥院の入口の門ふり

奥院　坂下門を入り曲折の石階を登ること二百余級まして唐銅の鳥居ま達す後陽成院の宸翰東照大權現の扁額を掲く右方ま宝庫あり銅板を以て之を包む夫より右ま向へ拜殿なり南ま面す前面五間横三間内廻り格天井の内ま五色の万菊を画く此奥ま唐銅鑄拔の門を設け其左右ま唐銅の獅子二頭蹲踞す是より石籬を廻ら〜内ま黄銅の宝塔一宇を鎮す高さ一丈許前ま石卓を据へ三具足を備ふ宝塔の基石ハ八角まして五級なり

上御供所　東廻廊續きま唐戸口あり



銅倉　東廻廊に接す銅板を以て外面を裹む故に名く種々の宝器を藏す

東通用門　東方より宮内への八口なり往事東照宮の東に大樂院とて別處あり〳〵故に宮内へ出仕する者多く此門より出入せり

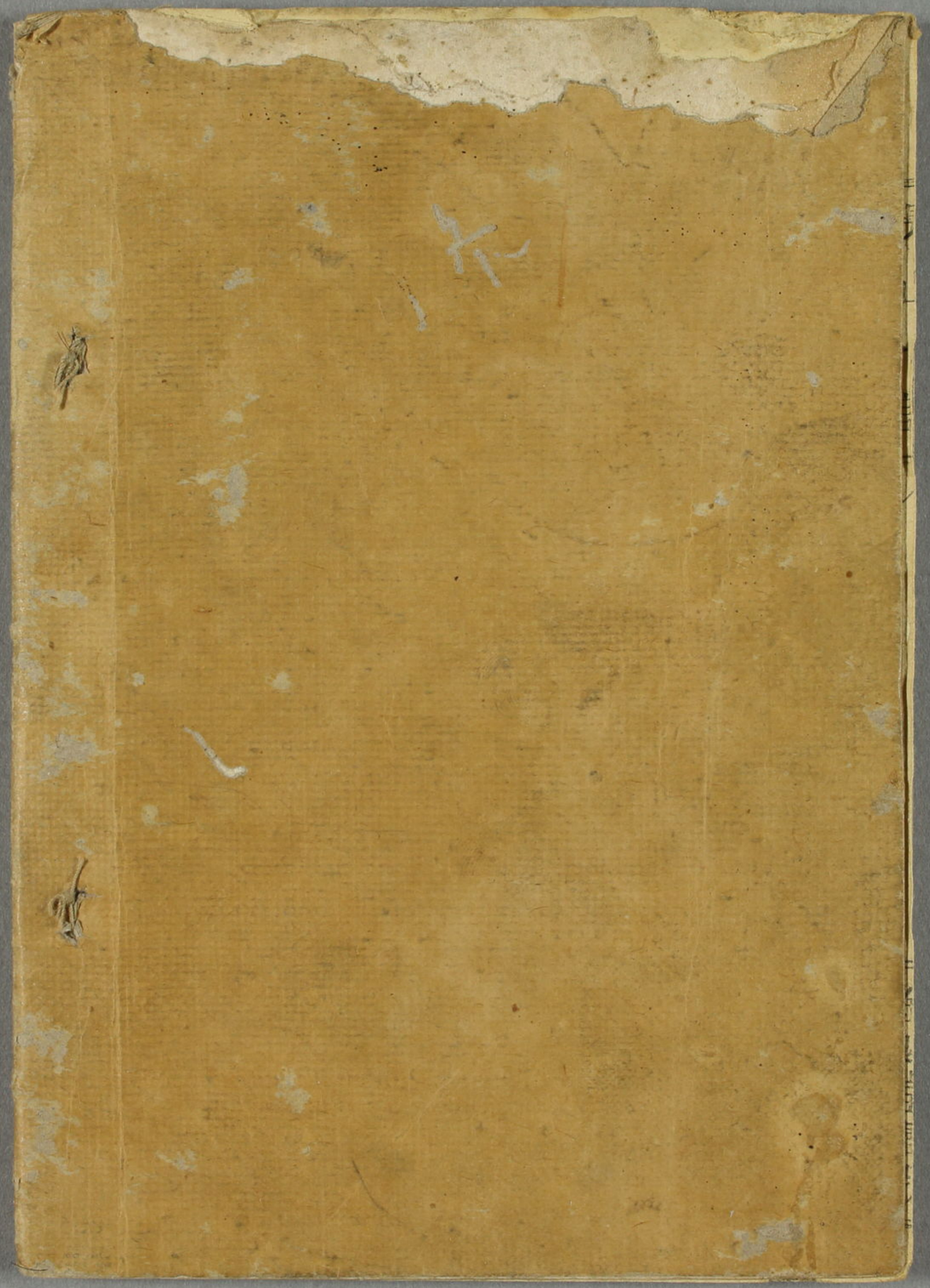
假殿　石華表の東方老杉陰森る処に矢來門あり是本社修繕の節假に遷座ある宮殿なり往時は毎歳十一月十五日當社前に於て湯立の神事を行ひ國家平穏を祈り併せて神樂舞を執行せりと云ふ

唐門　南に面す前に唐銅の鳥居あり之右より瑞籬を廻らし拜殿本殿を圍む

拜殿　前面五間横二間四方上部拜殿と本殿との相間も黒塗にして本社の石間に擬す

本殿　三間四面御所様四方縁柱は金襴卷正面の三扉は黒漆色に減金の金具を施し高欄濱縁階段共に黒漆色頗る壮麗なり脇障子は金泥地に隨人を画けり

唐銅宝塔　假殿の西にあり石籬を廻らす相傳ふ文化九年他火の為に銅倉焼亡し宝器の灰燼を拾めて供養せし塔なりと云ふ

神宮伶人以下の員數略す

諸祭典式及奉幣式略す